

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	デモクリトスのパイグニア : 3世紀 —PGM VII.167-185—
Author(s)	前野, 弘志
Citation	史学研究 , 310 : 1 - 25
Issue Date	2021-10-15
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00055717">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00055717</a>
Right	
Relation	



# デモクリトスのパイグニア：3世紀

—PGM VII.167-185—

前野 弘志

## 1. はじめに

「パイグニア」とは<sup>(1)</sup>、「饗宴」の場で「上演された」ないしは「語られた」、魔術の方法や不思議で面白い（場合によって役に立つ）話題のネタ帳のような文書である。この種の文書は『ギリシア語魔術パピルス』に、わずか2例のみが含まれる。一つは「饗宴の客の顔がロバの顔に見える魔術」で、これについては既に詳説した<sup>(2)</sup>。もう一つが今回ここで9回目の史料紹介として取り上げる「デモクリトスのパイグニア」Δημοκρίτου παίγνια (PGM VII.167-185) である<sup>(3)</sup>。

この「パイグニア」の作者とされるデモクリトスは、トラキア地方のアブデラ出身の「原子論」で有名な哲学者デモクリトス（生没年：前 c.460～380-370年<sup>(4)</sup>）のことである。奇妙なことに彼は、後世において、魔術を教えた人物と見なされ (GMP, p.334)、彼の作とされる魔術や手品に関する書物が大量に流布した。そのような書物を広めた偽作者たちの筆頭がボロスである<sup>(5)</sup>。ボロスはエジプトのメンデス出身の前3世紀の人で<sup>(6)</sup>、魔術と薬学に関する書物の作家であり、自分の作品がアブデラ出身のデモクリトスの名で世間に広まることを好んだので、しばしば「偽デモクリトス」と呼ばれた。ボロスと同時代人のカリマコス、自分が編纂した図書目録において<sup>(7)</sup>、ボロスがデモクリトス作とされる書物の偽作者であることを見破った。ボロスはピタゴラス派で、彼の書物には、奇譚、医学、農業、占星術に関する内容が含まれており、彼の最も有名な書物がデモクリトスの名で普及した『反感と共感』である。彼の作品は断片でしか現存しないが、一つは薬の材料に関するもの、もう一つは『驚異譚』θαυμάσια で、これは現在でもかなりの量が残る驚異譚作家たちの伝統における最古のかつ最高峰のものである<sup>(8)</sup>。

デモクリトスと魔術の関係について、プリニウス『博物誌』(Plin. HN) は、次のように伝えている。〈疑いなく魔術の起源はペルシアにおけるゾロアスターに由来する (30.3)。魔術に関する現存する論文の最初の著者はオスタネスであり<sup>(9)</sup>、彼はペルシア王クセルクセスのギリシア遠征に随行した時 (前480年)、行く先々で魔術を広め、ギリシア人を魔術研究に対する狂乱へと導いた (30.8)。ピタゴラス、

エンペドクレス、デモクリトス、プラトンは、魔術を学ぶために世界を旅行し<sup>(10)</sup>、帰国してから人々に魔術を教えた（30.9）。デモクリトスは、コプト人のアポロベクスとフェニキア出身のダルダノスの魔術について講義したが<sup>(11)</sup>、ダルダノスの書物を求めて彼の墓に侵入したほどである（30.9）<sup>(12)</sup>。デモクリトスの愛好者は、このことを否定しようとしたが、デモクリトスが人間の精神に魔術の甘味を教えたことは明らかである（30.9-10）<sup>(13)</sup>。つまり、すでにプリニウスの時代（1世紀）において、デモクリトスが魔術研究の第一人者か否かという議論が広まっていたのである。ただし今回扱う「デモクリトスのパイグニア」がボロスの偽作かどうかは分からない。

ところで近年、『ギリシア語魔術パピルス』の魔術は「グレコ・エジプト式の個人的儀式」Greco-Egyptian private ritualと定義されるようになった<sup>(14)</sup>。確かに、古代エジプトの魔術が元来は神官によって行われる国家鎮護の魔術という意味において「国家的」な魔術であったのに対して<sup>(15)</sup>、『ギリシア語魔術パピルス』の魔術が、個人の家であるいは屋外で素人によって自分の欲望のために行われる魔術であった点に着目すれば、それらは確かに「個人的」な魔術といえるだろう。しかし表題の文書の分析を通してみると、これらの文書が必ずしも素人が自分でやる魔術のためのマニュアルではなく、魔術を生業とする人々（つまりプロフェッショナル）のためのマニュアルでもあった可能性が浮かび上がってくるように思われる。

## 2. 文書情報

表題の文書（以下、当該文書と表記する）が集録された『ギリシア語魔術パピルス』VII巻は、ロンドン大英博物館に所蔵（*P. Lond.* 121）されており、表裏両面に書かれた巻物で、大きさは縦33cm 横200cm、表面に2+17コラム（1\*-66\*+1-592行）<sup>(16)</sup>、裏面に13コラム（593-1026行）があり、書かれた年代は225-320年（コラムXXVIIIまで3世紀、コラムXXIXから4世紀）である。テーベあるいはファイユーム地方のアルシノエ州で出土し、1888年に購入され、初版は1893年である<sup>(17)</sup>。表題の文書は裏面のコラムV（167-185行）に位置している。原文・翻訳・註釈はPGM Bd.II, S.7-8; *GMP*, p.119-120を利用した。構成は【1】表題（167行）、【2】方法①（168-169行）、【3】方法②（170-171行）、【4】方法③（171-172行）、【5】方法④（173行）、【6】方法⑤（174-175行）、【7】方法⑥（175-176行）、【8】方法⑦（177-178行）、【9】方法⑧（178-180行）、【10】方法⑨（180-181行）、【11】方法⑩（181-182行）、【12】方法⑪（182-184行）、【13】方法⑫（184-185行）。この文書の内容は、饗宴の場で実演された、あるいは語られた演芸のリストであり、おそらく一般人向けではなく、プロの芸人のために書かれたネタ帳の抜き書きであったと考えられる<sup>(18)</sup>。試訳は以下の通り。

### 3. 試訳

翻訳の凡例として、【 】内の数字はテキストの構成を、( )内の文章は筆者（以下、前野を指す）による補いを示す。これらはいずれも原文にはなく、筆者が付したものである。

【1】「デモクリトスのパイグニア」(167行)。【2】「青銅製品が金製に見えるようにすること。燃やしていない土硫黄をチョークの土と混ぜてから、(それで青銅製品を)拭いて磨きなさい」(168-169行)。【3】「卵がリンゴと似たものになること。卵をゆでてサフランを塗りなさい、ワインと混ぜて」(170-171行)。【4】「料理人が火を点けられないこと。ヤネバンダイソウの草を彼のカマドの中に置きなさい」(171-172行)。【5】「ニンニクを食べる人が臭わないこと。フダンソウの根を焼いて食べなさい」(173行)。【6】「老婆が長くおしゃべりせず、また多く飲まないこと。マツの木を打ち砕いて、(その屑を)彼女の混ぜワインに入れなさい」(174-175行)。【7】「描かれた剣闘士たちが闘うこと。彼らの下で野ウサギの頭を燻しなさい」(175-176行)。【8】「冷たい物を食べる人が火傷すること。カイソウを温かい湯に浸した後に、(そのお湯を)彼に(手を)洗わせるために与えなさい。救いはオリーブオイルで」(177-178行)。【9】「かろうじて付き合ってきた人々がうまくやること。ゴムをワインとハチミツとともに(混ぜて)、顔に塗るために与えなさい」(178-180行)。【10】「(ワインを)たくさん飲んだ人でも酔わないこと。雌豚の肺を焼いて食べなさい」(180-181行)。【11】「徒歩で旅をする人が喉が渴かないこと。卵をワインに入れてよくかき混ぜ、(それを)飲み干しなさい」(181-182行)。【12】「多く性交できること。50個のマツの実を2キュアトスのブドウシロップに入れ、コショウの粒も(加えて)擦り潰し、(それを)飲みなさい」(182-184行)。【13】「(あなたが)好きな時にいつでも勃起させること。コショウをハチミツといっしょに擦り潰して、(それを)あなたの一物に塗りなさい」(184-185行)。

### 4. 解説

【1】「デモクリトスのパイグニア」 Δημοκρίτου παίγνια· | (167行)。これはこの文書の表題である。

【2】「青銅製品が金製に見えるようにすること。」 Τὰ χαλκᾶ χρυσᾶ ποιῆσαι φαίνεσθαι· (168行)。この記述は錬金術と関係がありそうだ (GMP, p.119, n.1)<sup>(19)</sup>。「燃やしていない土硫黄をチョークの土と混ぜてから、(それで青銅製品を)拭いて磨きなさい。」 θεῖον ἄπυρον | μετὰ γῆς κρητηρίας μείξας ἔκμασσε. (168-169行)<sup>(20)</sup>。「土

硫黄「θεῖον」とは、硫黄の中で「火山地方に遊離の状態で産出するもの」を指し、硫黄を「燃やした煙で燻す消毒法が行われた」ので<sup>(21)</sup>、「燃やしていない」ἀπυρονとは、そのような使われ方をしていないものを指すのだろう。硫黄は黄色い鉱物であり、「燃える硫黄を錬金術師は「燃焼の素」と見」なし<sup>(22)</sup>、医薬や火薬、ロウソクの芯やマッチ、衣類の漂白などに利用された<sup>(23)</sup>。一方「チョーク」は、「白亜」とも呼ばれ、太古の浅い海に堆積した有孔虫、ウニ、貝殻などから生じた炭酸カルシウムからなる「石灰質岩石細粒」である<sup>(24)</sup>。もし「石灰」と「硫黄」を1：2の割合で混合し、加圧加熱処理すれば、現在日常的に使用されている「石灰硫黄合剤」と呼ばれる農薬が生成するが<sup>(25)</sup>、混ぜて擦ったくらいでは生成しない。もし何らかの方法で硫黄の黄色を青銅製品に塗布できれば、金製品に見えなくもないかもしれないが、このレシピに化学的根拠はなさそうである。

【3】「卵がリングと似たものになること。」| Ὅν ὁμοιον μῆλων γενέσθαι· (170行)。つまり卵をリングに見せかけることである (PGM, Bd.II, S.7)。饗宴のメニューは、「卵からリングまで」と呼ばれたように、前菜には卵が、デザートにはリングが、付きものだった<sup>(26)</sup>。デザートのリングだと思って食べたのがゆで卵だったとしたら、客はさぞかしびっくりしたことだろう。「卵をゆでてサフランを塗りなさい、ワインと混ぜて。」ζέσας τὸ ὠν χρεῖε κρόκῳ | μείζας μετ' οἴνου· (170-171行)<sup>(27)</sup>。「サフラン」と訳した κρόκος には、卵の「黄身」の意味もあり<sup>(28)</sup>、PGM はそのまま Safran「サフラン」と訳すが (Bd.II, S.7)、GMP は egg-yolk「黄身」と訳す (p.119)<sup>(29)</sup>。「黄身」の場合、ὠν τὰ κρόκα と表現するので<sup>(30)</sup>、ここは香辛料の「サフラン」と解して良いのではないだろうか。サフランの原産地はヨーロッパ南部からトルコで、花は淡い紫色だが、雌しべの柱頭が乾燥すると黄色になる<sup>(31)</sup>。カレーが黄色いのも、サフランやターメリックの黄色のせいである<sup>(32)</sup>。また GMP 訳では、[red] wine「(赤)ワイン」というように「(赤)」を補っており (p.119)、「卵」を「リング」に似せる訳だから、「赤ワイン」と黄色い「サフラン」で染めたと考えるのはうなづける。

【4】「料理人が火を点けられないこと。」Μάγειρον μὴ δύνασθαι τὴν πυρὰν | ἀνάψαι· (171-172行)。「ヤネバンダイソウの草を彼のカマドの中に置きなさい。」βοτάνην ἀείζωον ἕξ αὐτοῦ εἰς τὴν ἐστίαν· (172行)。ἀείζωον の PGM 訳は Mauerpfeffer で (Bd. II, S.7)、この語は手持ちの辞書に載ってなかったのでネットで画像検索すると、小さな黄色い星形の花が地面に絨毯のように咲く草であり、学名は Sedum acre であることが分かった<sup>(33)</sup>。Sedum acre を植物事典で調べると、和名は「ヨーロッパマンネングサ」であり、ヨーロッパ・北アフリカ原産のベンケイソウ科の多年草であることが判明した<sup>(34)</sup>。一方 GMP 訳は houseleek で (p.119)、これもネットで画像検索するとアーティチョークのような薄緑色の肉厚の丸い花なので<sup>(35)</sup>、ふたつは別物である。Liddell & Scott 訳では houseleek, Sempervivum となっているので<sup>(36)</sup>、GMP 訳を採用する。セムベルウィウムは属名で、原産地はヨーロッパで、高山に

見られるベンケイソウ科の多年草であり、「冬は雪の下になり、雪解けまで根から水分を補給できないために、ロゼットの葉に水を蓄える」とある<sup>(37)</sup>。英和辞典によると houseleek は「ヤネバンダイソウ」と訳されているように<sup>(38)</sup>、最も身近に見られるのがこの種類で、その名は人家の屋根によく生えることに由来するという<sup>(39)</sup>。学名は *Sempervivum tectorum* である<sup>(40)</sup>。この植物がこの悪戯に利用された理由はおそらく、一つにはその名の意味が「永遠に生きる」なので、カマドの中でも焼き殺されないという言葉遊びと、もう一つには実際にその葉が多く水分を含んでいたため火がつきにくかったのだろう。

【5】「ニンニクを食べる人が臭わないこと。」 | Φαγόντα σκόρδον μὴ ὀζειν· (173行)。「ニンニク」σκόρδον は σκόροδον に同じ<sup>(41)</sup>。「フダンソウの根を焼いて食べなさい。」[ρ]ίζας <σ>εὐτλου ὀπήσας φάγε. (173行)。「フダンソウ」σεῦτλον は τεῦτλον に同じ<sup>(42)</sup>。「フダンソウ」の「根」は、後世に改良されてサトウダイコンになるが、それに防臭効果があるのかどうかは確認できなかった。

【6】「老婆が長くおしゃべりせず、また多く飲まないこと。」 | Γραῦν μήτε πολλὰ λαλεῖν μήτε πολλὰ πίνειν· (174行)。「マツの木を打ち砕いて、(その屑を)彼女の混ぜワインに入れなさい。」πίτυν | κόψας βάλε αὐτῆς εἰς τὸ κρίμμα. (174-175行)。「マツの木」πίτυν (πίτυς) に鎮静効果があるのかどうか確認できなかった。マツヤニで口が開かなくなるというニュアンスだろうか。また「混ぜワイン」κρίμμα は κρᾶμα (mixed wine) の誤字であるが<sup>(43)</sup>、ワインに何を混ぜたものか分からなかった。

【7】「描かれた剣闘士たちが闘うこと。」 Μονομάχας ἐζωγραφεῖ|μένους μάχεσθαι· (175-176行)。「描かれた剣闘士たち」Μονομάχας ἐζωγραφεῖ|μένους とは、ガラスの表面に描かれた剣闘士たちの絵のことで、それに光が当たると、上記のような効果が生じたと考えられるが (GMP, p.120, n.6)、原理は不明である。しかし「彼らの下で野ウサギの頭を燻しなさい。」ὑποκάτω αὐτῶν κάπνισον λαγοῦ κεφαλῆν. (176行)とあるので、灯りと影と熱源を利用した走馬灯のようなものだったのかもしれない。「野ウサギの頭」には何の効果もないだろう。

【8】「冷たい物を食べる人が火傷すること。」 | Ψυχρὰ τρώγοντα κατακαίεσθαι· (177行)。「カイソウを温かい湯に浸した後に、(そのお湯を)彼に(手を)洗わせるために与えなさい。救いはオリーブオイルで。」σκίλλαν εἰς ὕδωρ χλιαρὸν | βρέξας δὸς αὐτῷ νίψασ[θ]αι. λύσις ἐλαίῳ. (177-178行)。「カイソウ (海葱)」σκίλλα の PGM 訳は Meerzwiebel (Bd.II, S.7)、GMP 訳は squill (p.120) で、Liddell & Scott 訳は squill, *Urginea maritima* である<sup>(44)</sup>。英名は sea onion で、つまり「海のネギ」という意味であり、ユリ科の多年草で、地中海沿岸などに分布し、重さが 2kg 以上もある巨大な球根(鱗茎)が特徴で、薬用に利用されたり蒸留酒を作ったとあり、毒については記述がない<sup>(45)</sup>。もっとも薬も毒も使い方しだいではあるが、別な植物事典によると、「ウルギネア」の「葉と鱗茎から出る液は、ステロイド性のサポニンを豊富

に含み、傷をつけると非常にねばつく」、*「ウルギネア・マリティマ（カイソウ）は「全草に強心配糖体という毒をもち、これは80～100グラムという少量でヒツジやヤギを殺すほどの効果をもつので、地中海地域では古代から殺鼠剤として使われた」とある*<sup>(46)</sup>。*「サポニン」とは、「主に植物界に分布」する「配糖体の総称」であり、「大多数は無定形粉末で、水・メタノール・熱稀エタノールに可溶」で、「水溶液は持続性の泡を生」じ、「他物質に対して細胞膜などの透過性を増加させる性質があり」、また「サポニンの特性として知られる溶血作用は赤血球」の「細胞膜を破壊する」、その他「粘膜刺激作用・魚毒作用があり、サポニンを多く含む植物の抽出液を漁獲に用いるのは日本を含め世界各地で見られる」とある*<sup>(47)</sup>。*「カイソウ（海葱）」からも「得られる」「強心配糖体は極めてすぐれた薬物ではあるが、同時に毒性も強く」、「心停止に到ることがある」という*<sup>(48)</sup>。一方で、プリニウス『博物誌』において「カイソウ」*Scilla* は何度も言及されているが、カイソウの球根は生で食べられるとか（19.95-96）、酒を作るとか（14.106）、酢に漬けるとか（20.98; etc.）、色々や薬用について述べている（20.99-101; 24.44-45; 23.59; etc.）が、毒については述べていないようである。「薬に用いられるカイソウ〈海葱〉は白い」（20.97）といい<sup>(49)</sup>、別の種類のカイソウがあったことをほのめかしており、定かではないが、有毒なものが存在したことは間違いない。*χλιαρόν* (*χλιαρός*) の訳は、「温かい、なまぬるい」<sup>(50)</sup>、*warm* 「温かい」<sup>(51)</sup>、*warm* 「温かい」（*PGM*, Bd.II, S.7）、*hot* 「熱い」（*GMP*, p.120）で微妙に異なるが、「熱い」お湯に手を浸せば火傷をするのは当然なので悪戯にならない。饗宴で手を洗うためにぬるま湯の入ったフィンガーボールに手を入れると、カイソウからしみ出た粘液に触れて強い痛みが走るので、火傷をしたと勘違いさせるといふ悪戯ではないだろうか。オリーブオイルは火傷の薬といったところか。

【9】「*καρουτζε* 付き合ってきた人々がうまくやること。」*Τοὺς [μεμ]ει|[γμ]ένους μόγις εἶ[ῶ] ποι[εῖ]ν* (178-179行)。この文章は訳しにくい。*PGM* 訳と *GMP* 訳も大きく異なっている。*PGM* 訳は *Daß [Liebende] es nur mühsam tun* 「恋人たちがそれをやるとの思いですること」（Bd.II, S.7）、*GMP* 訳は *To let those who have difficulty intermingling perform well* 「人付き合いが苦手な（シャイな）人々に上手くやらせること」（p.120, n.7）である。前者では倦怠期を迎えた恋人たちが、後者では非社会的な人々が主題となっている。*[μεμ]ει|[γμ]ένους* (*μειγνυμι*) は「混合する、混ざり合う、交わる、交際する、同衾する」といった意味で<sup>(52)</sup>、確かに「交際」とも「社交」ともとれる。しかし主語が複数形の完了分詞になっていることから、「人付き合いが苦手な（シャイな）人々」とは訳しにくく、むしろ「付き合ってきた人々」と訳した方が良さそうである。そして「*καρουτζε*」*μόγις* とあるので、むしろ「嫌いな人となんとか付き合ってきた」といったニュアンスが感じられる。そしてこれらの「パイグニア」が饗宴の場で披露されたのなら、「嫌いな人から宴会に誘われて断れない関係」のことを指しているように思われる。「*ゴムをワインとハチミ*

ツとともに (混ぜて)、顔に塗るために与えなさい。」 κόμι μετὰ οἴνου καὶ [μέλιτος] | δὸς εἰς τὴν ὄψιν μυρ[ίσα]σθαι. (179-180行)。ここでいう「ゴム」は、いわゆる「ゴムノキ」から採れる「ゴム」ではないようだ。プリニウス『博物誌』によれば、最良のゴムがエジプトの棘木から採れるが、それだけでなくアーモンドの木、サクラの木、スモモの木、ブドウの木、オリーブの木などなど、さまざまな木から採れるという (Plin. *HN*. 13.66-67; 24.105-106; 24.109-110)。どうしてこれで「うやくやる」ことが出来るのか分からないが、自分の素顔を隠すパックのようなものなのだろうか。

【10】「(ワインを) たくさん飲んだ人でも酔わないこと。」 Πολλὰ πίνοντα καὶ μὴ με|θύειν. (180-181行)。「雌豚の肺を焼いて食べなさい。」 χοιραῖον πνεύμονα ὀπτήσας φάγε. (181行)。なぜ「雌豚」でなければならないのか、そもそもこれが効くのか不明である。酔わない方法として、アテナイオス『食卓の賢人たち』(2.52d)<sup>(53)</sup>に、飲む前に「苦アーモンド」を食べることが言及されている (*GMP*, p.120, n.8)。

【11】「徒歩で旅をする人が喉が渇かないこと。」 Ὀδοιποροῦντα | μὴ διψᾶν. (181-182行)。「卵をワインに (入れて) よくかき混ぜ、(それを) 飲み干しなさい。」 ὡν <εἰς> οἶνον ἀνακόψας ρόφα. (182行)。ὄδοιπορέω は「歩いて旅をする」の意味であり<sup>(54)</sup>、*GMP* 訳 travel [a long way] home 「家へ長旅をする」(p.120) の home は必要だろうか。ἀνακόψας (ἀνακόπτω) は beat up eggs 「卵をよくかき混ぜる／泡立てる」の意味である<sup>(55)</sup>。この飲み物はいわば日本の「卵酒」のようなもので、確かに疲労回復には効果はありそうだが、喉の渇きを抑えるのに効くかどうかは不明である。アテナイオス『食卓の賢人たち』(2.69f)<sup>(56)</sup>には「レタスの茎」に喉の渇きを抑える効能あることが言及されている (*GMP*, p.120, n.9)。

【12】「多く性交できること」 Πολλὰ βι[ν]εῖν | δύνασθαι. (182-183行)。「多く」 Πολλὰ は「何度でも」とも「長く」ともとれる。「50個のマツの実を2キュアトスのブドウシロップに入れ、コショウの粒も (加えて) 擦り潰し、(それを) 飲みなさい。」 στροβίλια πεντήκοντα μετὰ δύο κύα[θ]ων | γλυκέος καὶ κόκκους πεπέρεως τρίψας πίε. (183-184行)<sup>(57)</sup>。「マツの実」と訳した στροβίλια (στροβίλιον) は、στρόβιλος (pine-cone) の指小辞で<sup>(58)</sup>、*PGM* は「マツボックリ」 Fichtenzapfen (Bd. II, S.8)、*GMP* は「小さなマツボックリ」 tiny pinecones (p.120) と訳している。しかし「小さい」とはいえ「50個」もの「マツボックリ」を擦り潰して、液体と混ぜて飲み干すことは出来ないだろう。στροβίλια は「マツボックリ」ではなく、マツボックリのヒダの中にある「マツの実」のことを指しているのではないだろうか。「マツボックリ」は専門的には「球果」と呼ばれ、表面は「果鱗」に覆われているが、その内側に種子が包まれている<sup>(59)</sup>。実際に漢方において「マツの実(種子)」の仁(ニン: 殻を取り除いた内部) は強壯剤として用いられた<sup>(60)</sup>。「キュアトス」 κύαθος は、



もともとワインを混酒器から酌み出す「杓子（しゃくし）」のことであるが、液量の単位でもあり約45ccに相当するので<sup>(61)</sup>、「2キュアトス」は約90ccとなる。「ブドウシロップ」と訳した γλυκέος (γλυκύς) を、PGMは「甘いワイン」 süßen Weins (Bd.II, S.8)、GMPも「甘いワイン」 sweet wine (p.120) と訳しているが、γλυκύςは形容詞としては「甘い」を意味し、名詞としては「ブドウの汁」ないし grape syrup「ブドウシロップ」を意味する<sup>(62)</sup>。「ブドウシロップ」はアルコールを含まないので、「ワイン」とは訳せないだろう。同様に、アテナイオス『食卓の賢人たち』(1.18d-e)<sup>(63)</sup>でも、性行の回数を増やす三つの方法が紹介されている (GMP, p.120, n.10)。アテナイオス『食卓の賢人たち』(2.57b-d) に「マツの実」の話が出てくるが (GMP, p.120, n.5)、上記のような効用については言及がない。

【13】「(あなたが) 好きな時にいつでも勃起させること。」 Στ[ύ]ειν, | ὅτε θέλεις· (184-185行)。「コショウをハチミツといっしょに擦り潰して、(それを) あなたの一物に塗りなさい。」πέπερι μετὰ μέλιτος τρίψας χρίε σου τὸ πρᾶγμα. | (185行)。コショウはインド原産の常緑つる植物で、ギリシア・ローマ時代には、南インドのマラバル産のコショウがインド洋の貿易風「ヒッパロスの風」に乗って輸入され、シナモンとともに最も珍重された香辛料で、コショウの粒は同量の銀と交換されたという<sup>(64)</sup>。コショウは確かに刺激がありそうだ。ハチミツは接着剤だろう<sup>(65)</sup>。

以上の「パイグニア」は、饗宴の場で披露されることを想定して作成されたものと考えられている (GMP, p.120)。表題は【1】「デモクリトスのパイグニア」であるが、人を驚かせたり笑わせたりする悪戯に当たるもの (【2】【3】【4】【7】【8】) と、実際に上手く行くかどうかは別にして、日常生活の中で役に立つ実用的内容を含むもの (【5】【6】【9】【10】【11】【12】【13】) に分類される。また、デタラメなもの (【2】【9】) ばかりでなく、それなりの根拠の認められそうなもの (【3】【4】【7】【8】【11】【12】【13】) もあり、また今回は判断できなかったもの (【5】【6】【10】) もある。こうしてみると、意外とそれなりの根拠がありそうなものが全体の半数以上を占めていることになる。いずれにせよ、これらの「パイグニア」が饗宴という場で披露されたのならば、次に、饗宴とはどのような場だったのかを記述しなければならない。

## 5. 饗宴

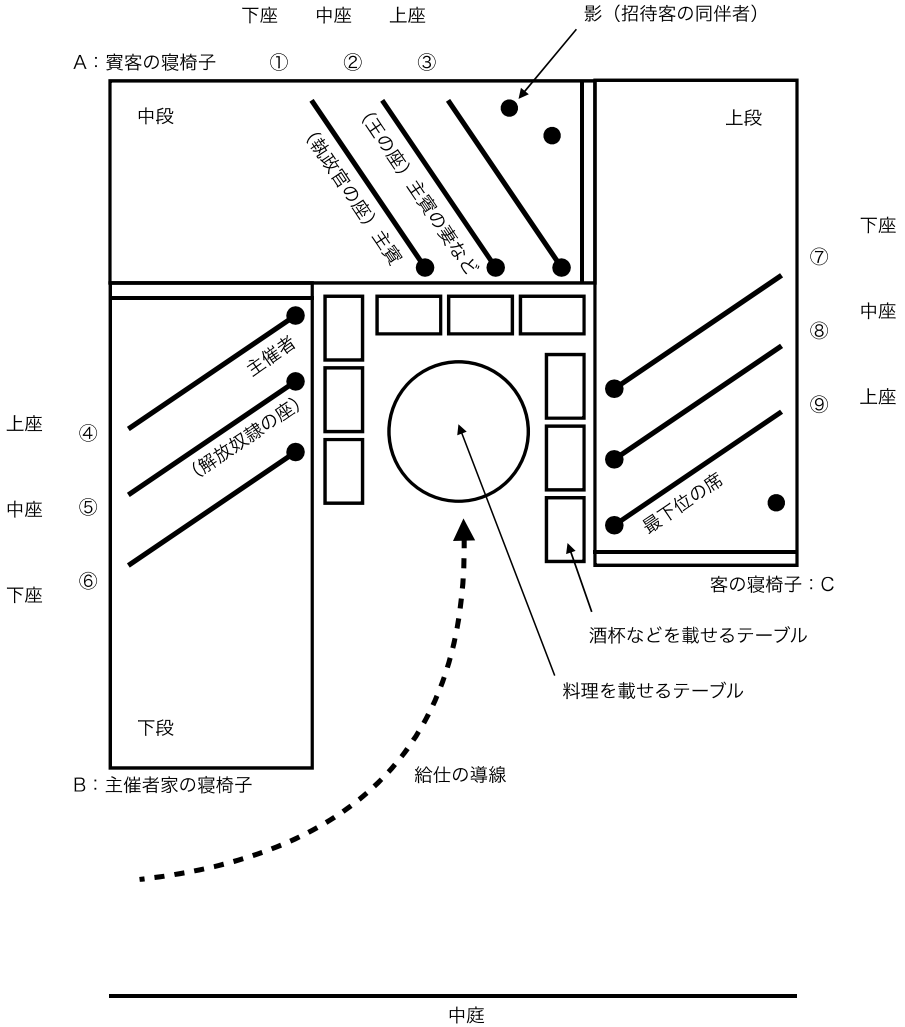
1) 定義：「饗宴」convivium / συμπόσιον とは、主人が客を自宅に招き、飲食をともにしながら、さまざまな会話や余興を楽しむ社交の場である。通常、二部構成になっており、第一部が「正餐」cena、第二部が「酒宴」comissatio である<sup>(66)</sup>。饗宴はギリシア人からエトルリア人を通じてローマ人に伝わった習慣で、ローマ人が

饗宴を行うようになったのは、ハンニバル戦争（前218-201年）が終わった頃からである<sup>(67)</sup>。

2) 場所：饗宴が行われた場所は、そのために設計された「食堂」tricliniumである<sup>(68)</sup>。食堂は大広間と庭園の間にあった<sup>(69)</sup>。この語は、もともとギリシア語の「三台のベッド」に由来し、三台のベッドをコの字型に並べて、その上に横たわって、主人と客たちが飲食する部屋を意味する<sup>(70)</sup>。この種のベッドには、本物のベッドの組み合わせではなく、コンクリート、セメント、レンガなどで作り付けされたベッド型の設備もあり、邸宅の中や庭園で出土しており、半円形のものもある<sup>(71)</sup>。これらのベッドはテーブルに向かって少し高く傾斜していた<sup>(72)</sup>。しかしもっとも一般的なのは、本物の三台のベッドをコの字型に組み合わせたもので、一台のベッドは3人から4人が横になれるほどの大きさがあった<sup>(73)</sup>。これほどの食堂を備えた邸宅を所有し、費用のかかる饗宴が開けたのは当然、富裕な市民だけであるが、『トリマルキオの饗宴』のような豪華なものは例外であり、日常的に開かれた饗宴は、それほど奇抜なものではなかった<sup>(74)</sup>。饗宴の目的は、純粹に友人を歓待し余暇を楽しむためのものもあったが、商売上の接待や損得ずくの接待もあり、招待する方にとっても招待される方にとっても、必ずしも心地よいものとは限らず、断るに断れない義務でもあった<sup>(75)</sup>。また派手好きの主催者にとっては、自分の富みや気前のよさをひけらかす場でもあった<sup>(76)</sup>。

3) 席次：饗宴における席次は（図を参照）<sup>(77)</sup>、コの字型に置かれた三台のベッドの開口部から見て、右が上段C、奥が中段A、左が下段Bであり、それぞれの段の右が上座、中が中座、左が下座と呼ばれた<sup>(78)</sup>。中段Aが賓客のベッド、上段Cが格下の客のベッド、下段Bが主催者家族のベッドである<sup>(79)</sup>。そして主賓の座は中段の下座①、主催者の座は下段の上座④で、二人がもっとも近くで話ができるように隣り合わせになっており、主賓の座は「執政官の座」とも「法務官の座」とも呼ばれた<sup>(80)</sup>。また下段の中座⑤は「解放奴隷の座」と呼ばれた<sup>(81)</sup>。そして上段の上座⑨が最も低い座とされたが、その理由は、料理が載せられる中央のテーブルから最も遠かったからである<sup>(82)</sup>。テーブルは、コの字型に組まれた三台のベッドの中央に置かれ、直径1mほどの円形で、三本の脚で支えられたもので、それとは別に、各人の前には酒杯などを載せる長方形のサイドテーブルがあった<sup>(83)</sup>。客の中には、a 主催者によって正式に招待された客と、b 正式に招待された客が連れてきた同伴者と、c 正式に招待はされていないが臨時に参加が許可された客がいた。饗宴には多かれ少なかれ前もって正式な招待をするのが常であり<sup>(84)</sup>、そうやって招待された客がaで、彼らには横たわるべきベッドの座があらかじめ用意された。彼らはいくらかの割り前を出すことになっていた<sup>(85)</sup>。これら正式な招待客に同伴してきた者たちがbで、彼らも歓迎された客であり、主催者が招待者に同伴者を連れてくるよう依頼することもしばしばあった<sup>(86)</sup>。同伴者は「影」umbraと呼ばれ、自

寝椅子の配置と席次



分を同伴してくれた人物の足元のベッドや、別に用意された椅子に座って、料理のおこぼれに与った<sup>(87)</sup>。cは「食客」parasitusと呼ばれる者である。主人や客たちは正餐の前に公衆浴場に行くのが習慣になっており<sup>(88)</sup>、饗宴の前の入浴も招待に含まれることが多かったので、食客たちは公衆浴場の前で主催者を待ち伏せし、主催者に饗宴への参加をせがんだ<sup>(89)</sup>。彼らは主催者の庇護民であり、饗宴のおこぼれ

に与って飢えをしのいだ<sup>(90)</sup>。彼らは日本で言う「太鼓持ち」のような存在で、富裕層におべんちゃらや冗談を言うことによって<sup>(91)</sup>、あるいは犬儒派のクラテスや妻のヒッパルキアのように哲学談義をすることによって<sup>(92)</sup>、生計を立てていた。一方、主催者の妻や子供は元来、椅子に座って食事をし<sup>(93)</sup>、妻はせいぜい夫のベッドに腰掛ける程度であったが<sup>(94)</sup>、帝政期になると妻や女性客もベッドに横たわるようになった<sup>(95)</sup>。ギリシアでは、遊女を除いて、女性は饗宴に参加することが許されなかったが、エトルリアでは妻を同席させるのが普通であったので、ローマ人の饗宴はエトルリア風であったと言える<sup>(96)</sup>。

4) 開始時刻：客たちは、玄関に入ってロビーを通り、家の神棚「ララリウム」のある中央の大広間に通され、そこで他の客が揃うまで待たされた<sup>(97)</sup>。そして皆が揃うと食堂に通されるが、食堂に入る時には、凶運を持ち込まないように、右足から入るのが慣わしとなっており、それから皆、手と足を奴隷に洗わせた<sup>(98)</sup>。そして彼らは奴隷に案内されて、銘々に用意された座に着いた<sup>(99)</sup>。饗宴が開始された時間は、季節によって異なり、冬は14時頃、夏は16時頃であった<sup>(100)</sup>。夕食が一日のメインの食事であり、夕食の時間が現代と比べて早い理由は、古代ローマ人には朝食と昼食を軽く済ませるか抜く、そしてランプのオイルを節約するために明るいうちに夕食を済ませる、という習慣が一般にあったためである<sup>(101)</sup>。

## A. 正餐

1) 献立：「卵からリングまで」ab ovo usque ad malaは、正餐のコースに由来する言葉で、「初めから終わりまで」を意味する<sup>(102)</sup>。客たちにはその日のお品書きが渡された<sup>(103)</sup>。食事は前菜→主菜→デザート<sup>(104)</sup>の三部構成になっていた。正餐の開始に際して、神々への祈りが行われた<sup>(105)</sup>。前菜は、食欲を刺激するための食事で、サラダ、野菜、きのこ、ソースのかかったエビ・カニや魚が好まれ、そしてゆで卵は必須であり、食前酒として蜂蜜酒が出された<sup>(106)</sup>。主菜は、少なくとも3皿からなるメイン・ディッシュであり、ここではワインが出された<sup>(107)</sup>。意外なことに、料理は平等に振る舞われたのではなく、主催者にとって最も重要な客には、他の客とは異なるよりよい料理と、よりよいワインが振る舞われるのが常であり、そのことが批判されることもあった<sup>(108)</sup>。テーブルにはテーブルクロスが敷かれたが、客の目の前でテーブルを拭くことは無作法とされていたので、一つの料理が終わるごとに、テーブルごと新しいものに交換された<sup>(109)</sup>。これにはまた別な理由もあり、それは「影」や奴隷たちが残り物を食べられるようにするための配慮であり、食べ物のおすそ分けの連鎖を、客は斟酌せねばならなかった<sup>(110)</sup>。主菜が終わると、一切が片付けられ、客たちにパンが配られて、客たちはそれで手や口を拭い、そのパンを犬にやるが、その理由は、犬が魔術の女神ヘカテーの使い魔であり、その時間には既に陽も沈んでいて、闇の悪霊を寄せ付けないために犬を満腹にしておいてや

る必要があると考えられたからである<sup>(111)</sup>。そしてデザートの前に、家の守り神ラレースに塩が捧げられた<sup>(112)</sup>。デザートは、果物、焼き菓子、スパイスのきいた料理からなった<sup>(113)</sup>。

2) テーブルマナー：ドレスコードは厳しくなく、よっぽど格式の高い饗宴でない限り、トガでなくとも、カジュアルな服装でもよしとされた<sup>(114)</sup>。サンダルを奴隷に脱がさせ<sup>(115)</sup>、食事の前に指輪を外すことも一般的なことであった<sup>(116)</sup>。ベッドに座を占めた客は、クッションの上に左肘をついて横になり、右手で食べ物を口に運んだ<sup>(117)</sup>。スープや卵はスプーンを使って食べ、かたつむりなどは身抜きピンを使って食べたが、フォークが使われたのは2世紀頃からで、その他の料理はあらかじめ食べやすい大きさに切り分けられており、それを右手の指で摘んで食べたため、コースが終わるごとに指を洗う水やナプキンが必要だった<sup>(118)</sup>。またナプキンの代わりに、奴隷の髪で手を拭うこともあった<sup>(119)</sup>。熱い料理をフーフーして冷ますのはマナー違反とされた<sup>(120)</sup>。骨や殻などの食べかすを床に落とすことはマナー違反とならなかった<sup>(121)</sup>。一方、客が食べ物を誤って床に落とすことは不吉なこととされ、落ちた食べ物の掃除をする奴隷も嫌がったが、床に落とされた食べ物は、地下の霊たちへの供物でもあった<sup>(122)</sup>。また、わざと大量のワインが床に振りこぼされたが、これもマナー違反ではなく<sup>(123)</sup>、神々への一種の献酒であり、その際には讃歌が歌われた<sup>(124)</sup>。ベッドを離れず、尿瓶で放尿することは無礼な行いとされたが、放屁に対しては寛容であり、その理由は、音楽や詩の朗読の間に席を立つことが無作法とみなされたからである<sup>(125)</sup>。「食べるために吐き、吐くために食べる」という文句は有名であるが、実際には一般のローマ人には無縁なことだったようである<sup>(126)</sup>。

3) おみやげ：全ての客に豪華な引き出物が出されることもあったが<sup>(127)</sup>、標準的な饗宴では、くじ引きで引き出物を持たせ、たいていは香油や香水などが多かったが<sup>(128)</sup>、衣料品や装飾品や調度品などもあった<sup>(129)</sup>。また、客が余った料理をナプキンに包んで、自分の奴隷たちへのおみやげとして持ち帰ることも許されていた<sup>(130)</sup>。このように見ると、饗宴は単なる浪費ではなく、弱者救済のセーフティネットの役割も果たしていたと言えるだろう。

## B. 酒宴

1) 開始時刻：多くの場合、「正餐」は自然と「酒宴」に移行した<sup>(131)</sup>。今風に言えば「一次会」の後の「二次会」のようなものであろう。「酒宴」comissatioの直訳は「お祭りさわぎ、どんちゃん騒ぎ」である<sup>(132)</sup>。正餐は2時間から3時間は続いたので<sup>(133)</sup>、酒宴は遅くとも、冬には17時、夏には19時になり、奴隷がランプに火を灯すのを合図として酒宴が始まった<sup>(134)</sup>。テーブルは片付けられ、参加者は手を洗い、それまで着ていた服を着替えて、花冠を被り、香水を身につけ、ワインテーブルが運び込まれた<sup>(135)</sup>。酒宴は明け方まで続くことも稀ではなく、その間、人々

は飲みかつ食い続けた<sup>(136)</sup>。正餐の時の客とは別に、あらたな客もやって来た<sup>(137)</sup>。遊女たちもやって来て、酒宴はもともと男だけの集いであったが、帝政期には風紀が乱れ、主催者の妻も参加するようになり、また、一夜のパートナー探しの猟場とも化し、花冠、香水、香油がその場を華やかにした<sup>(138)</sup>。

2) 酒宴の王：酒宴に際しては、それを取り仕切る「酒宴の王」rex bibendi がさいころで選ばれた<sup>(139)</sup>。この役はラテン語で magister bibendi とも呼ばれたが、ギリシア語の συμποσίαρχος の翻訳である<sup>(140)</sup>。彼はワインを割る水の割合を決めたり、参加者に娯楽に協力するよう求めた<sup>(141)</sup>。また彼は「ご健康を祈って」などの乾杯の辞を述べた<sup>(142)</sup>。ワインが回し飲みされる時、客は讃歌を歌いながら、酒杯をグルグル回してワインを床にわざとこぼして神々に捧げた<sup>(143)</sup>。

### C. 余興

饗宴（正餐と酒宴）が催されている間中、バックグラウンドミュージックは常に演奏された<sup>(144)</sup>。会話や議論が生まれ、その内容は参加者の知的レベル次第であり、高尚なものから卑俗なものまで様々であったが、ローマ人の饗宴では一般に、ギリシア人の饗宴におけるほど高尚なものは期待できなかったようであり、食事中や料理の間には、リラの独奏・合奏、独唱・合唱、喜劇の一場面、詩の朗読など、綿密に計画された余興が行われた<sup>(145)</sup>。時には主催者がオリジナルの詩を披露することもあったが、客にとってはおうおうにして苦痛の種であった<sup>(146)</sup>。多くの饗宴は粗雑になり、道化師、奇術師、曲芸師、踊り子、喜劇俳優、小人、女装の男などが雇われ、服を着た猿、アクロバット、剣闘士、卑猥なベリーダンサーなどが喜ばれた<sup>(147)</sup>。謎かけ、作曲、物語・詩の朗読、コッタボス遊び、様々なボードゲーム、そしてさいころ賭博が熱狂的に遊ばれ<sup>(148)</sup>、食客はこれらの遊びに長け、同時に学問的でもあり、プルタルコスは、どのようなことが議論的になったかを『宴会での論点』や『ローマ人の論点』にまとめている<sup>(149)</sup>。饗宴の現場で働いた奴隷たちも、料理・給仕・掃除だけでなく、上記のようなエンターテイメントも行った多芸な者もいた<sup>(150)</sup>。

### D. 暴力的終焉

酒宴は「どんちゃん騒ぎ」なので、明け方まで続いた。中には夜の街頭に飛び出して騒ぐ者、流血の喧嘩沙汰を起こす者もあり、しばしば暴力的な終わり方をした<sup>(151)</sup>。

## 6. 芸人たち

最後に問題となるのは、饗宴という場で「パイグニア」を行ったのは誰かという

問題である。上記の一般的な記述を、アテナイオス『食卓の賢人たち』に依拠して、より具体的に肉付けしてみたい。

アテナイオス（2世紀後半から3世紀）の『食卓の賢人たち』全15巻の長大な作品の構成は、第1日目の饗宴（1-5巻）、第2日目の饗宴（6-10巻）、第3日目の饗宴（11-14巻）、第4日目の饗宴（15巻）となっており、第2日目以降の料理は前菜からではなく、前日の続きから始まるので、4日間で一つの長大な饗宴を形成していることになる。5巻の末尾には「これらの言葉の後に、多くの人々が退席し出し、知らない間に宴会はお開きとなった。」ἐπὶ τούτοις τοῖς λόγοις ἀναχωροῦντες οἱ πολλοὶ λεληθότως διέλυσαν τὴν συνουσίαν.<sup>(152)</sup> (222.b) とあり、ここでは時刻について触れられていないが、10巻の末尾には「言われたことをとくと考えていた我々を日没が捕らえつつあるので、酒杯に関する議論を明日に延期しよう。」ἐπειδὴ καὶ ἡμᾶς ἐσπέρα καταλαμβάνει ἀναπεμπαζομένους τὰ εἰρημένα τὸν περὶ τῶν ἐκπωμαίων λόγον εἰς αὐρίον ἀναβαλῶμεθα. (459.b)<sup>(153)</sup> とあり、14巻の末尾には「そして実際すでに日が暮れていた。そういう訳で（我々は）散会した。」καὶ γὰρ ἐσπέρα ἦν ἡδὴ διελύθημεν οὖν οὕτως. (664.f)<sup>(154)</sup> とあり、15巻の末尾は散会に先立つ讃歌の場面で終わっているので（702.c）、末尾は散逸していると思われるが<sup>(155)</sup>、これらの表現からすると、いずれの饗宴も日暮とともにお開きになったと考えられ、これらの饗宴は「正餐」で終わり、「酒宴」には至っていないことが分かる。

14巻の冒頭に「我らが輝かしき主催者ラレンシオスは毎日、我々が常に新しい話題を議論した後には、そのつど「歌手や朗誦者など」ἀκροάματα、さらには「道化師」γελωτοποιούςをも招き入れるので、さあ、我々もまた何か彼らについて議論しよう」（613.c-d）とあり<sup>(156)</sup>、議論に疲れた時にはいつも気晴らしに様々な芸人が呼び入れられたことが分かる。この議論で話題になった芸人の中には、次のような者たちがいた。まず「道化師」について。①スキュティアの王子アナカルシスの「饗宴」ἐν συμποσίῳ に招かれた「猿」πιθήκουを連れた「道化師」γελωτοποιῶν（613.d）、②エウリピデスの『縛られたメラニッペ』に登場する「毒舌」χάριτας κερτόμουςで笑いを取る者（613.d）、③クセノフォンの『饗宴』に出る「子供」παῖδαを連れて飛び入り営業を申し込む「道化師」γελωτοποιός フィリッポス（614c-d）、④テレファネスの『アテナイ市』に見えるディオメイア区のヘラクレス神殿を拠点とし、そこから呼ばれて営業に出向き、「軽い話」ῥαθυμίαςや「冗談」γελοῖαで評判の「六十人」οἱ ἑξ と呼ばれる「道化師」γελωτοποιῶνの団体（614.d-e）。次に「放浪芸人」が話題となる。①ディオニュシオスの『同名人たち』に出るケフィソドロスという「放浪芸人」πλάνουは身が軽く、アクロポリスの急な崖を駆け上り、竿を使ったアクロバットを見せた（615.e-f）<sup>(157)</sup>、②クリュシッポスの『快樂と善について』に書かれた「放浪芸人」πλάνοςのパンタレオンは臨終の際に、お前だけに金を埋めた場所を教えてやると言って二人の息子を騙した（616.a-b）、③またクリュシッポスの

同書には、「駄洒落屋」 φιλοσκώπτης が現れる (616.b)。

上記の途中に「奇術師のことについてはすでに先に述べた。」 περί γὰρ θαυματοποιῶν ἤδη προειρήκαμεν. (for on the subject of magicians we have spoken already.) (615.e)<sup>(158)</sup> という回想の言葉があり、1巻のいろいろな芸人たちを話題とした箇所に戻ると、そこには、A) 芸を称えて像が建てられた芸人が列挙されている。①アレクサンドロス王に仕えた「毬使い」 σφαιριστήν のアリストニコス (19.a)、②「小石隠し」 ψηφοκλέπτου のテオドロス (19.b)、③「豎琴奏者」 κιθαριστοῦ のアルケラオス (19.b)、④「歌手」 ᾠδοῦ のクレオン (19.b)。B) 宮廷お抱えの芸人としては、①「ミモス役者」 λογόμμος のヘロドトス (19.c)<sup>(159)</sup>、②「踊り手」 ὀρχηστής のアルケラオス (19.c)、③「笛吹」 αὐλητοῦ のソストラトスの息子たち (19.d)。C) その他、①猛獣に自分の体を食わせたり、なぞなぞをやる「旅芸人」 πλάνος のマトレアス (19.d)、②「操り人形師」 νευροσπάστη のポティノス (19.e)、③火を自動発火させ、また他の多くの「不思議なこと」 φάσματα を巧みにやってのけ、それによって人々の精神を狂わせたクラティステネス (19.e)、④彼は「奇術師」 θαυμαποιός のクセノフォンの弟子であった (19.e)。D) さらにモノマネ芸人として、①「道化師」 γελωτοποιός のエウディコス はレスラーやボクサーのモノマネをやったとアリストテレスの弟子アリストクセノスが伝え (19.f)、②ストラトンはディテュランボスのモノマネをやって「驚かせた」 ἐθαυμάζετο (19.f)、③オイノナスは「豎琴の弾き語り」 κιθαρῳδίας のモノマネをしたとアリストクセノスが伝え (20.a)、④パノデモスによれば、ディオペイテスは動物の膀胱にワインとミルクを満たしておいて、それらを押し自分の口から噴き出させて見せ (20.a)、⑤「形態模写芸人」 ἠθολόγος のノエモンも似たようなことをやったという (20.a)。

以上のことから、「芸人」には大きく分けて、「道化師 (笑わせ屋)」と「奇術師 (驚かせ屋)」があり、実際にはいろいろなジャンルがあって、互いに重複もしており、このような職業の人々をひっくるめて「色物芸人」と呼んでもいいだろう。彼らの地位は必ずしも低いものではなく、宮廷お抱えの者もいたし、ポリスから顕彰されて像を建立される者もいた。一方で、腹をすかせた「角兵衛獅子」のような“親子”もいた。また、拠点を持つ者もいたが、放浪する者もいた。こういったエンターテイナーたちが、王宮・アゴラ・饗宴の場で芸を披露して生計を立てていた。そして彼らの共通の要素として、他人を「騙す・惑わす・魅了する」ということがあったように思われる。

## 8. おわりに

以上、列挙した「芸人」たちには、「ペテン師／魔術師」 γόητης や「騙しのテクニク／呪法」 μαγανεία という語は使われず、また彼らが使ったであろう「パイグニア」



παίγνια には、他の魔術文書とは違って、神霊の名や印は全く書かれていないことから、古代において「芸人」と「魔術師」は区別されていたのかも知れない。しかし、それにもかかわらず、「芸人」たちのネタ本が『ギリシア語魔術パピルス』に、たとえ例外的な少数であるとはいえ含まれていた事実は、両者の共通性が皆無ではなかったことを示唆していると言えるだろう。

最近、『ギリシア語魔術パピルス』に書かれた魔術は「グレコ・エジプト式の個人的儀式」Greco-Egyptian private ritual と定義されるようになった。しかし、今回ここで取り上げた類の文書に着目すれば、『ギリシア語魔術パピルス』は、「饗宴の余興」や「大道芸」をして日銭を稼ぐ人々（プロのエンターテイナー）にとってのネタ本でもあった可能性が浮かび上がってくる。そうだとすれば、『ギリシア語魔術パピルス』は必ずしも「個人的な儀式」とは言えないことになる。もしかしたら、『ギリシア語魔術パピルス』には、他にもプロの魔術師の営業のために書かれた文書が多く含まれているのかも知れない。

## 参考文献

- Athenaeus the Deipnosophists* : C. B. Gulick, I-VII, Loeb Classical Library, [1927-1941].  
Attilio Mastrocinque [2003] : *Dinners with the Magus*, *MHNH*, 3, p.75-94.  
Attilio Mastrocinque [2017] : *The Mysteries of Mithras : A Different Account*, Mohr Siebeck, Tübingen.  
David Bain [1998] : Salpe's ΠΑΙΓΝΙΑ: Athenaeus 322 A and Plin. H. N. 28.38, *The Classical Quarterly*, 48-1, [1998], p.262-268.  
*DKP* : *Der Kleine Pauly*, Bd.1 [1964], Bd.2 [1967], Bd.3 [1969], Bd.4 [1972], Bd.5 [1975].  
『Flora』II : トニー・ロード他、井口智子責任訳、小佐田愛子他訳、産調出版 [2005].  
Friz Graf [2002] : Augustine and Magic, Jan N. Bremmer / Jan R. Veenstra (eds.), *The Metamorphosis of Magic from Late Antiquity to the Early modern Period*, Peeters, Leuven, Paris, Dudley, MA, p.87-104.  
*GMP* : Hans Dieter Betz (ed.), *The Greek Magical Papyri in Translation including the Demotic Spells*, 2nd Edition [<sup>1</sup>1986, <sup>2</sup>1992].  
Jacco Dieleman [2019] : The Greco-Egyptian Magical Papyri, D. Frankfurter (ed.), *Guide to the Study of Ancient Magic*, Brill, Leiden / Boston, Chapter 13, p.283-321.  
J. N. Davidson, Don't try this at home : Pliny's Salpe, Salpe's *Paignia* and magic, *CQ* n.s. 45, [1995], p.590-592.  
Liddell & Scott<sup>9</sup> : *Greek-English Lexicon*, Clarendon Press, Oxford, New (ninth) edition completed [1940], with revised supplement, [1996].  
Max Wellmann, *Die Georgika des Demokritos*, *Abhandlungen der preussischen Akademie der Wissenschaften: philologisch-historische Klasse*, Nr.4, Verlag der Akademie der

- Wissenschaften, Berlin [1921]。
- Max Wellmann [1928] : Die  $\Phi\Upsilon\text{I}\text{K}\text{A}$  des Bolos Demokritos und der Magier Anaxilaos aus Larissa, Teil I, *Abhandlungen der preussischen Akademie der Wissenschaften, Philosophisch-historische Klasse*, Nr.7, Berlin。
- OCD<sup>4</sup> : *The Oxford Classical Dictionary*, 4th Edition [2012]。
- OEAE : Donald B. Redford (ed. in chief), *The Oxford Encyclopedia of Ancient Egypt*, vol.2, Oxford University Press, [2001]。
- Peter Connolly / Hazel Dodge [1998] : *The Ancient City: Life in Classical Athens & Rom*, Oxford University Press。
- Peter G. Bolt [2003] : *Jesus' Defeat of Death: Persuading Mark's early readers*, Cambridge University Press, Cambridge, New York, Melbourne, Madrid, Cape Town, Singapore, São Paulo。
- PGM : Karl Preisendanz (Hrsg.), *Papyri Graecae Magicae: Die Griechischen Zauberpapyri*, Bd.I [1928, <sup>2</sup>1973], Bd.II [<sup>1</sup>1931, <sup>2</sup>1974], (Bd.III [1941])。
- RE : *Real-Encyclopädie der klassischen Altertumswissenschaften*, [1893-1980]。
- TM : <https://www.trismegistos.org/index.php>。
- 青柳正規 [1997] : 『トリマルキオの饗宴－逸楽と飽食のローマ文化』、中公新書。
- アテナイオス『食卓の賢人たち』:柳沼重剛訳、西洋古典叢書、1巻 [1997]、2巻 [1998]、3巻 [2000]、4巻 [2002]、5巻 [2004]。
- 『ギリシャ語辞典』:古川晴風、大学書林 [1989]。
- 『元素大百科事典 (新装版)』:ペル・エンゲハグ、渡辺正監訳、朝倉書店 [2014]。
- 『古代ローマ生活事典』 [2011/原書1995] : カール＝ヴィルヘルム・ヴェーバー、小林澄栄訳、みすず書房。
- 『古代仕事大全』: ヴィッキー・レオン、本村凌二監修、原書房 [2009/原書2007]。
- 『自分で採れる薬になる植物図鑑』: 増田和夫監修、柏書房 [2006]。
- 『植物の世界』: 八尋洲東編、朝日新聞社 [1997]。
- 『植物3.2万 名前大辞典』: 日外アソシエーツ編、紀伊国屋書店 [2008]。
- 『新英和大辞典』: 小稲義男編者代表、研究社、第5版 [1985]。
- 『図説 植物用語事典』: 清水建美、八坂書房 [2001]。
- 『生物学辞典』 巖佐庸/倉谷滋/斎藤成也/塚谷裕一編、第5版、岩波書店 [2013]。
- 『世界有用植物事典』: 堀田満/緒方健/新田あや/星川清親/柳宗民/山崎耕宇編、平凡社 [1989]。
- 『日本大百科全書』: 小学館、第2版 [1994]。
- パトリック・ファース [2007/原書1994] : 『古代ローマの食卓』 目羅公和訳、東洋書林。
- 『ブリタニカ国際百科事典 小項目版2017』 for iphone。
- 『プリニウスの博物誌』: 中野定雄/中野里美/中野美代訳、雄山閣I～III巻、第4版[1992]。

デモクリトスのパイグニア：3世紀—PGM VII.167-185—（前野）

- 『サテュリコン—古代ローマの諷刺小説』：ペトロニウス、国原吉之助訳、岩波文庫 [1991]。  
前野弘志 [2015]：『『ギリシア語魔術パピルス』を読む』『西洋史学報』42号1-29頁。  
前野弘志 [2019]：「悪霊・幽霊・病気・災難に対する護符」『西洋史学報』45号103-122頁。  
前野弘志 [2020] ①：「自分の影を操る魔術：4世紀—PGM III. 612-632—」『中国四国歴史学地理学協会年報』16号38-50頁。  
前野弘志 [2020] ②：『『ギリシア語魔術パピルス』に見る魔術師の自画像』『史学研究』305号22-50頁。  
前野弘志 [2021] ①：「パイグニア—魔術と化学マジック—」『史学研究』309号1-30頁。  
前野弘志 [2021] ②：「饗宴の客の顔がロバの顔に見える魔術：3世紀—PGM XIb. 1-5—」『西洋史学報』48号に掲載決定。  
『羅和事典』水谷智洋編、研究社、改訂版 [2009]。

## 註

- (1) 「パイグニア」については、前野弘志 [2021] ①を参照。
- (2) この魔術については、前野弘志 [2021] ②を参照。
- (3) この文書は、前野弘志 [2015] 20頁のPGMの目次no.93「宴会でのいかさま」と同じ文書。その概要については、前野弘志 [2020] ② 34頁で紹介した。
- (4) *DKP*, Bd.1, [1964], Demokritos.1, K.1478。
- (5) *RE*, V-1, [1903], Demokritos 6), K.135-140、特に K.138。
- (6) メンデスは、ナイルデルタに位置する都市で、その名は「去勢しない牡羊の家、永遠なる場所の主」に由来し、新王国に栄えたが、前343年にペルシアが再びエジプトを征服した時に破壊されたものの、プトレマイオス2世が前275年に再建し、前3世紀にはワインと香水の産地として、地中海交易の拠点として繁栄した (*OEAЕ*, vol.2, [2001], Mendes, p.376)。
- (7) カリマコス is キュレネ出身のアレクサンドリアの詩人、120巻からなる図書目録を編纂した (*DKP*, Bd.3, [1969], Kallimachos, 3.K., K.73-79、特に K.73-74)。
- (8) 以上、ボロスについては、*RE*, III-1, [1970], Bolos, 3) Bolos aus Mendes in Ägypten, K.676-677 (M. Wellmann); *OCD*<sup>4</sup>, Bolus (*RE* 3, Suppl.1), p.239より。
- (9) 歴史上のオスタネスは、クセルクセス王の王宮付きの神学者であり、後代において、オスタネスの名で伝わる偽書も多い (*GMP*, p.337)。
- (10) デモクリトスは若い頃、知識を求めてエジプトやバビロニアまで多くの国々を旅し (*RE*, V-1, [1903], Demokritos 6), K.135)、エジプトの神官から魔術を習ったとされた (*GMP*, p.334)。
- (11) 前野弘志 [2020] ②の (5) アポロベクス、(13) ダルダノスを参照。
- (12) 「セトナ・カエンワセト物語」を彷彿とさせる (前野弘志 [2020] ② 40-41頁を参照)。

- (13) 以上、魔術の起源に関するプリニウスの証言については、『プリニウスの博物誌』III巻、1242-1243頁を参考にして要約した。
- (14) Jacco Dieleman [2019] p.284。
- (15) 前野弘志 [2015] 1頁。
- (16) この文書のコラム数と行数の数え方については、前野弘志 [2019] 118頁、註2)、註3)を参照。
- (17) この巻のメタデータについては、*PGM*, Bd.II, S.1; *GMP*, p.xxiii; TM 60204を参照した。
- (18) 当該文書を扱った文献として、管見の限り、以下のものが挙げられる。当該文書は「饗宴の客の顔がロバの顔に見える魔術」*PGM* XIb.1-5とペアで言及されることが多く、そのような文献については、既に『西洋史学報』48号において紹介したので、ここでは題目だけを列挙する。① Peter G. Bolt [2003] p.189, n.185, ② Friz Graf [2002] p.91, n.16, ③ Attilio Mastrocinque [2003] p.79, ④ Attilio Mastrocinque [2017] p.271, ⑤ Jacco Dieleman [2019] p.304。また、デモクリトスの「パイグニア」と他の「パイグニア」との関係性を論じたものとして、⑥ Max Wellmann [1921] は、デモクリトスのパイグニアが魔術パピルスの小冊子として特別なものとしながらも、パイグニアという文学ジャンルは前3世紀から既に存在し、サルベのエロトパイグニアとの関係性を指摘し、この分野の主要な作家としてボロス、ムナセアス、ラウイナスを挙げている (S.29, Anm.3)、⑦ Max Wellmann [1928] は、パイグニアの背景にある神秘的かつ魔術的な自然研究について、以下のように要約している。この全く新しい自然研究、それは大部分において神秘的・魔術的な性質のものであるが、これが始まったのはヘレニズム時代のエジプトにおいてであった。有機物であれ無機物であれ全ての自然物 φύσειсの領域において、それらが持つ秘密に満ちた驚くべき力、超自然的な特性、共感と反感の作用、これらを探究し証明する努力がなされるようになった。人間、動物、植物、鉱物、金属、これらは秘密に満ちた力の運び手として見なされ、人間の病気や苦しみを癒やし、人間に富、幸運、名声、驚くべき力を授けることが出来ると考えられるようになり、自然学と医学が融合することとなった。この種の文学の代表者たちは、啞然とさせる信じやすさでもって、ギリシア人のペリパトス派、デモクリトス、アポロドロスに並んで、ベルシア人のゾロアスター、オスタネス、ユダヤ人のダルダノス、フェニキア人のモコス、エジプト人のアポロベックスなど、彼らのインチキな書物を参照した。この種の文学は自然文学 φυσικάと表現され、その担い手たちは自然文学者 ἀνήρ φυσικόςと呼ばれたが、その呼び名のヘレニズム時代における普通の意味は、超自然的な事象と自然における関連に精通した人物、すなわち魔術師であった。魔術師の代表的人物として、前200年頃のボロス=デモクリトス、マネトス、ポンベイウス時代のニギディウス・フィグルス、デメトリオス、アウグストゥス帝時代の新プラトン主義者アナクシラオス、ティベリウス帝の時代の医者でデモクリトス信奉者のアポロドロス、ネロ帝時代のアフロ

デモクリトスのパイグニア：3世紀—PGM VII.167-185—（前野）

ディシアス出身のクセノクラテス、より後の時代の農業経営者パンフィロス、後1世紀末のヘルメス・トリスメギストス、100年頃のアイガイ出身のポレス、120年頃のネプトゥナリウス、アエリウス・プロモトゥス、アポロニオス何某、3世紀の農業経営者ディデュモス、4世紀の獣医アプシュルトスが知られている（S.3-4）。⑧ J. N. Davidson [1995] も、プリニウスに記述された助産婦のサルベは、アテナイオスに記述された『パイグニア』作家のサルベと同一人物であり、その本の内容は「デモクリトスのパイグニア」と似たもので、医学的なアドバイスを含むものと指摘する（p.591）。⑨ David Bain [1998] も、⑧の結論を批判的に継承する（p.262-268）。

(19) 錬金術と『ギリシア語魔術パピルス』の関係については、別な機会に論じる。

(20) θείον は「土硫黄」（『ギリシャ語辞典』、θείον、518頁）。κρητηρίας は κρητάριον, “piece of chalk”（Liddell & Scott<sup>9</sup>, κρητάριον, p.995）。

(21) 以上、土硫黄と硫黄について、『日本大百科全書』2巻、硫黄、34頁。

(22) 『元素大百科事典（新装版）』、硫黄、571頁。

(23) 『日本大百科全書』2巻、硫黄、34頁；『元素大百科事典（新装版）』、硫黄、574頁。

(24) 『ブリタニカ国際第百百科事典 小項目版2017』for iphone、白亜。

(25) 『ブリタニカ国際第百百科事典 小項目版2017』for iphone、石灰硫黄合剤。

(26) パトリック・ファース [2007] 101頁；『古代ローマ生活事典』、デザート、383頁。

(27) χρεῖτε は「塗れ」（『ギリシャ語辞典』、χρίω、1208頁）。κρόκος は「サフラン」（『ギリシャ語辞典』、κρόκος、644頁）。

(28) Liddell & Scott<sup>9</sup>, κρόκος, p.998。

(29) *GMP*, p.119, n.3によれば、アテナイオス『食卓の賢人たち』（13.484e）に「卵の黄身」が「サフラン」も意味するとあるが、13.484e という文章は存在しない。また索引で検索したが、該当しそうな箇所を見つけることが出来なかった。

(30) Liddell & Scott<sup>9</sup>, κρόκος, p.998。

(31) 『自分で採れる薬になる植物図鑑』、サフラン、40頁。

(32) 『世界有用植物事典』、カレー、1191頁。

(33) <https://www.baumschule-horstmann.de/shop/exec/product/696/9184/Scharfer-Mauerpfeffer.html>（最終閲覧日2021年3月15日）。

(34) 『植物3.2万 名前大辞典』、ヨーロッパマンネングサ 〈*Sedum acre* L.〉、726頁；『Flora』II、ヨーロッパマンネングサ、1328-1331頁。

(35) <https://www.britannica.com/plant/houseleek>（最終閲覧日2021年3月15日）。

(36) Liddell & Scott<sup>9</sup>, ἀείζων, p.26。

(37) 『植物の世界』5巻、セムベルウィウム、5-233頁。「ロゼットの葉」とは、「あたかも地中の根から生ずるようにみえる葉」のことであり（『図説 植物用語事典』140頁）、タンポポの葉を想像すればよい。

(38) 『新英和大辞典』、houseleek、1023頁。

- (39) 『植物の世界』 5巻、セムペルウィウム、5-233-234頁。
- (40) 『植物3.2万 名前大辞典』、ヤネバンダイソウ 〈*Sempervivum tectorum* L.〉、708頁。
- (41) Liddell & Scott<sup>9</sup>, σκόροδον, p.1614。
- (42) Liddell & Scott<sup>9</sup>, σεϋτλον, p.1591。「フダンソウ」という訳については、前野弘志[2020] ① 42-43頁を参照。
- (43) Liddell & Scott<sup>9</sup>, κρᾶμα, p.989。
- (44) Liddell & Scott<sup>9</sup>, σκίλλα, p.1610。
- (45) 『世界有用植物事典』 「*U. maritima* (L.)」 1076頁。
- (46) 『植物の世界』 10巻、ウルギネア、10-43頁。
- (47) 『生物学辞典』、サポニン、544頁。
- (48) 『生物学辞典』、強心配糖体、319頁。
- (49) 訳文は、『プリニウスの博物誌』 II巻、880頁より引用。
- (50) 『ギリシャ語辞典』、χλιαρός, 1201頁。
- (51) Liddell & Scott<sup>9</sup>, χλιαρός, p.1994。
- (52) 『ギリシャ語辞典』、όμεϊγγυμι, 698頁。
- (53) アテナイオス『食卓の賢人たち』 1巻、187頁。
- (54) 『ギリシャ語辞典』、όδοιπορέω, 765頁。
- (55) Liddell & Scott<sup>9</sup>, ἀνακόπτω, p.109。
- (56) アテナイオス『食卓の賢人たち』 1巻、256頁。
- (57) *GMP* は two pepper grains 「二粒のコショウ」と訳しているが<sup>9</sup> (p.120)、原文に「二粒」にあたる単語はない。
- (58) Liddell & Scott<sup>9</sup>, στροβίλιον, p.1655。
- (59) 『世界有用植物事典』、マツ、813-814頁；『植物の世界』 11巻、マツ科、11-228頁、11-242頁。
- (60) 『大日本百科事典』 2版、マツ、717頁。
- (61) 『ギリシャ語辞典』、κύαθος, 647頁。
- (62) 『ギリシャ語辞典』、γλυκύς, 227頁；Liddell & Scott<sup>9</sup>, γλυκύς, p.352。
- (63) アテナイオス『食卓の賢人たち』 1巻、65-66頁。
- (64) 『世界有用植物事典』、コショウ、819頁。
- (65) *GMP*, p.120, n.11には、「勃起」の魔術として *PGM* VII. 194-195; *PDM* lxi.58-62を参照とある。後者は確かに勃起の魔術であるが、前者はサソリに刺された時の痛みをとる魔術であり、ここでも混乱が見られる。
- (66) 『古代ローマ生活事典』、酒宴、258頁。
- (67) 青柳正規 [1997] 115-116頁。
- (68) 青柳正規 [1997] 116頁；『古代ローマ生活事典』、饗宴、142頁。
- (69) パトリック・ファース [2007] 60頁。

- (70) 青柳正規 [1997] 116頁。
- (71) パトリック・ファース [2007] 59-60頁。
- (72) 『古代ローマ生活事典』、寝台、309頁。
- (73) パトリック・ファース [2007] 58-59頁；『古代ローマ生活事典』、饗宴、142頁。1台のベッドに3人が横たわり、3台で9人となるのが正しいとされたのは、9柱のムーサに喩えられたからである（青柳正規[1997]118頁；パトリック・ファース[2007]73頁）。
- (74) 『古代ローマ生活事典』、饗宴、140-141頁。
- (75) 『古代ローマ生活事典』、饗宴、140頁。
- (76) 『古代ローマ生活事典』、饗宴、140頁；『古代ローマ生活事典』、ゴシップ、207-208頁。
- (77) この図は、青柳正規 [1997] 116頁；『古代ローマ生活事典』、饗宴、142頁；パトリック・ファース [2007] 75頁；『サテュリコン—古代ローマの諷刺小説』340頁；Peter Connolly / Hazel Dodge [1998] p.149に掲載された図を参考にして筆者（前野）が作成した。
- (78) 青柳正規 [1997] 118頁。
- (79) パトリック・ファース [2007] 74-75頁。
- (80) 青柳正規 [1997] 118-119頁；パトリック・ファース [2007] 77頁；『古代ローマ生活事典』、饗宴、142頁。
- (81) 青柳正規 [1997] 118-119頁。一方、ファースは下段の下座⑥を「自由民の座」と呼び、その家の解放奴隷の席とする（パトリック・ファース [2007] 77頁）。
- (82) パトリック・ファース [2007] 77頁。
- (83) パトリック・ファース [2007] 82頁。一方、四角いテーブルという記述もある（『サテュリコン—古代ローマの諷刺小説』339頁；『古代ローマ生活事典』、饗宴、142頁）。
- (84) 『古代ローマ生活事典』、饗宴、141頁。
- (85) アテナイオス『食卓の賢人たち』5巻、183頁、註1。
- (86) 『古代ローマ生活事典』、饗宴、141頁；『古代ローマ生活事典』、テーブルマナー、387頁。
- (87) パトリック・ファース [2007] 77頁；『古代ローマ生活事典』、饗宴、141-142頁；『古代ローマ生活事典』、テーブルマナー、387-388頁。
- (88) パトリック・ファース [2007] 52頁。
- (89) 『古代ローマ生活事典』、饗宴、141頁。
- (90) パトリック・ファース [2007] 53頁。
- (91) パトリック・ファース [2007] 78-79頁。
- (92) 『古代仕事大全』337-338頁。
- (93) 『古代ローマ生活事典』、饗宴、143頁；『古代ローマ生活事典』、テーブルマナー、385頁。

- (94) 青柳正規 [1997] 118頁。
- (95) 『古代ローマ生活事典』、饗宴、143頁；『古代ローマ生活事典』、テーブルマナー、385頁。
- (96) 青柳正規 [1997] 115-118頁。
- (97) パトリック・ファース [2007] 64頁。
- (98) パトリック・ファース [2007] 67頁；『古代ローマ生活事典』、テーブルマナー、386頁。
- (99) 『古代ローマ生活事典』、饗宴、142頁。
- (100) 『古代ローマ生活事典』、夕食、509-510頁（古代ローマの時間では、昼の第9時から第10時）；*DNP*, Bd.4, [1998], *Gastmahl*, II. Rom, K.804。一方、パトリック・ファース [2007] 52-53頁は、昼の第10時ないし11時（今の午後16時ないし17時）に始まったとする。古代ローマの時間については、『古代ローマ生活事典』、時間、230-233頁を参照。
- (101) パトリック・ファース [2007] 52頁。
- (102) パトリック・ファース [2007] 101頁；『古代ローマ生活事典』、デザート、383頁。
- (103) パトリック・ファース [2007] 108頁。
- (104) パトリック・ファース [2007] 99頁。具体的な詳しい献立については、パトリック・ファース [2007] 108-115頁；『古代ローマ生活事典』、夕食、512頁を参照。
- (105) 『古代ローマ生活事典』、饗宴、146-147頁；『古代ローマ生活事典』、テーブルマナー、389頁。
- (106) 『古代ローマ生活事典』、饗宴、143頁；『古代ローマ生活事典』、夕食、510頁。
- (107) 『古代ローマ生活事典』、饗宴、143-144頁。
- (108) パトリック・ファース [2007] 76頁；『古代ローマ生活事典』、饗宴、144頁；『古代ローマ生活事典』、テーブルマナー、386頁。
- (109) パトリック・ファース [2007] 83頁、99頁。
- (110) パトリック・ファース [2007] 84頁。
- (111) パトリック・ファース [2007] 105頁。
- (112) 『古代ローマ生活事典』、饗宴、147頁；『古代ローマ生活事典』、テーブルマナー、389頁。
- (113) 『古代ローマ生活事典』、饗宴、144頁；『古代ローマ生活事典』、デザート、384頁。
- (114) パトリック・ファース [2007] 63頁；『古代ローマ生活事典』、テーブルマナー、385頁。
- (115) 『古代ローマ生活事典』、テーブルマナー、385頁。
- (116) パトリック・ファース [2007] 64頁。
- (117) 『サテュリコンー古代ローマの諷刺小説』339頁；『古代ローマ生活事典』、饗宴、143頁；『古代ローマ生活事典』、テーブルマナー、385頁；『古代ローマ生活事典』、



デモクリトスのパイグニア：3世紀—PGM VII.167-185—（前野）

寝台、309頁。この姿勢は、エトルリア人とローマ人が埋葬される時と同じ姿勢であった（パトリック・ファース [2007] 71頁）。

- (118) 『サテュリコン—古代ローマの諷刺小説』 339-340頁；パトリック・ファース [2007] 96-97頁；『古代ローマ生活事典』、テーブルマナー、386頁。
- (119) パトリック・ファース [2007] 97頁。
- (120) 『古代ローマ生活事典』、テーブルマナー、386頁。
- (121) 『古代ローマ生活事典』、テーブルマナー、387頁。食堂の天井は「天界」を、床は「冥界」を象徴し、床に落ちた食べ物は死者のものとなったと考えられた（パトリック・ファース [2007] 68-71頁）。そしてベッドは「人間界」を象徴した（パトリック・ファース [2007] 82頁）。
- (122) パトリック・ファース [2007] 70頁。
- (123) パトリック・ファース [2007] 69頁。
- (124) パトリック・ファース [2007] 122-123頁。
- (125) 『古代ローマ生活事典』、テーブルマナー、388頁。一方で、放屁もひんしゅくものであったとの評価もある（パトリック・ファース [2007] 85頁）。
- (126) パトリック・ファース [2007] 85頁；『古代ローマ生活事典』、テーブルマナー、389頁；『古代ローマ生活事典』、催吐剤、224-225頁。
- (127) 『古代ローマ生活事典』、饗宴、145頁。
- (128) 『古代ローマ生活事典』、テーブルマナー、387頁。
- (129) 『古代ローマ生活事典』、贈り物、58頁。
- (130) パトリック・ファース [2007] 130-131頁；『古代ローマ生活事典』、饗宴、145頁；『古代ローマ生活事典』、テーブルマナー、386頁。
- (131) 『古代ローマ生活事典』、饗宴、143頁。
- (132) 『羅和事典』 研究社、改訂版 [2009]、comissatio、133頁。
- (133) 『古代ローマ生活事典』、饗宴、143頁。
- (134) 『古代ローマ生活事典』、饗宴、143頁；『古代ローマ生活事典』、夕食、512頁。酒宴が始まる時刻について、訳文は「召使が枝付燭台に火を灯すと、実際に酒宴が始まることになっていた。普通はそれまでに饗宴が2、3時間続いていた。要するに、たいいてい9時頃に、つまり夏は16時頃、冬は14時を回ってすぐの頃に（→時間）酒宴がはじまったのである（下線部は筆者による）」とあるが（『古代ローマ生活事典』、饗宴、143頁）、原文は Das fing nämlich tatsächlich erst an, wenn die Diener die Kandelaber-Leuchten angezündet hatten. Dann war das G. in der Regel schon seit zwei, drei Stunden im Gange. Es begann nämlich meist um die neunte → Stunde, d.h. im Sommer gegen 16 Uhr und im Winter kurz nach 14 Uhr (Karl-Wilhelm Weeber, *Alltag im Alten Rom*, 4., verbesserte Auflage, Manheim, [2011], S.125-126) である（下線部は筆者による）。訳文は下線部 Es を das Trinkgelege（酒宴）ととっているが、そうではなく

Das G.(=Gastmahl)「饗宴」ととるべきであろう。そうしないと、「饗宴」=「正餐」は「酒宴」の2～3時間前に、つまり11時から13時の間に始まったことになり、「ローマ人のこの正餐は、むしろ9時か、遅くとも10時に、つまり、季節に応じて14時から16時のあいだの午後の(早い)時間に、始まったのである」(『古代ローマ生活事典』、夕食、509-510頁)の記述と矛盾する。

- (135) パトリック・ファース [2007] 115-119頁。
- (136) 『古代ローマ生活事典』、饗宴、143頁。
- (137) パトリック・ファース [2007] 100頁；『古代ローマ生活事典』、酒宴、258-259頁。
- (138) 『古代ローマ生活事典』、酒宴、259頁。
- (139) 『古代ローマ生活事典』、酒宴、259頁。
- (140) パトリック・ファース [2007] 119頁。
- (141) パトリック・ファース [2007] 120頁；『古代ローマ生活事典』、酒宴、259頁。
- (142) 『古代ローマ生活事典』、乾杯の辞、123-124頁。
- (143) パトリック・ファース [2007] 122-124頁。
- (144) パトリック・ファース [2007] 127-129頁。
- (145) 『古代ローマ生活事典』、饗宴、144頁。
- (146) 『古代ローマ生活事典』、饗宴、144-145頁。
- (147) パトリック・ファース [2007] 127-129頁；『古代ローマ生活事典』、饗宴、145頁。
- (148) パトリック・ファース [2007] 124-125頁；『古代ローマ生活事典』、さいころ賭博、222-224頁。
- (149) パトリック・ファース [2007] 126-127頁。
- (150) パトリック・ファース [2007] 87-88頁。
- (151) 『古代ローマ生活事典』、酒宴、260頁。
- (152) アテナイオス『食卓の賢人たち』 2巻288頁、訳は筆者(前野)による。以下、『食卓の賢人たち』からの記述については、柳沼訳を大いに参考にした。また原文および英語訳としては、*Athenaeus the Deipnosophists* I-VII を参考にした。
- (153) アテナイオス『食卓の賢人たち』 4巻148頁、訳は筆者(前野)による。
- (154) アテナイオス『食卓の賢人たち』 5巻329頁、訳は筆者(前野)による。
- (155) 以上、ここまでアテナイオス『食卓の賢人たち』 1巻、解説、432-434頁。
- (156) アテナイオス『食卓の賢人たち』 5巻180頁、訳は筆者(前野)による。
- (157) この部分の解釈については、*Athenaeus the Deipnosophists*, VI, p.317, n.c による。
- (158) 原文は、*Athenaeus the Deipnosophists*, VI, p.315より。下線および訳文は、筆者(前野)による。
- (159) 「ミモス」とは「モノマネ」のことで、「ミモス劇」とは神話の一部や日常生活の一場面を演じたもの(アテナイオス『食卓の賢人たち』 1巻69頁、註1)。

(広島大学大学院人間社会科学研究所)